各地区情報

▼北海道

民放クラブの講演会

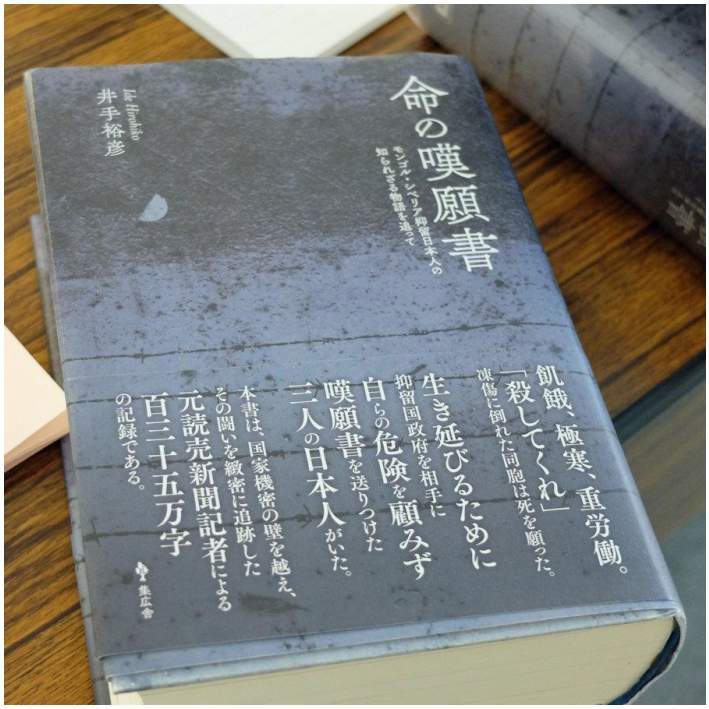
西野　泰子（HBC）

「ここの講演会に出ると、得した気分になるんですよ」

最高の誉め言葉をいただき、思わずガッツポーズ。

会員内の勉強会から発展した「民放クラブの講演会」では、放送されない初耳話がポイントになっていて、今では参加者の半数以上を一般の方々が占めるまでになっています。

20回目の講師は、読売新聞出身のジャーナリスト井手裕彦（いで・ひろひこ）さん。現役時代の取材をさらに進めながら、静かな執筆環境を求めて移住した北海道の地で、3年がかりで書き上げた1295ページ、135万字、まるで辞書のようなボリュームの大書『命の嘆願書』。この中から「妻と子のシベリア抑留」と題して、10人ほどについて詳細にお話していただきました。もちろん、講演会としては本邦初公開の内容です。



講師の井手さんの著書『命の嘆願書』

抑留を自分事として考えてほしいという狙いで、質問をはさみながら進められました。

「抑留者は、ある風景を見た時に、家族に会いたいという気持ちがつのるそうです。それは何でしょう？」

実際の抑留者の答えで一番多かったのは「空」だったそうです。空は遥か遠い日本とつながっているから。

理不尽なシベリア抑留について関心はあっても一人一人のドラマはあまりにも過酷で、悲しみを超えて怒りさえ感じてしまいます。会場内には溜息が聞こえハンカチを使う姿もありました。

参加者の感想を一部ご紹介します。

「抑留された人々と家族のそれぞれのお話は全て涙なしには聞けないものでした」

「具体的な抑留経験事例とその家族、子供たちへの影響の悲惨さを改めて知ることができました。感動的なお話を面白く拝聴させていただきました」

調査報道の素晴らしさと共に、これほどの情熱を傾けられる講師の井手さんに、軽く嫉妬を覚えた講演会になりました。

次回は、現役ラジオ・パーソナリティーに登場いただく予定です。